



Title	タベの燈、夜明けの法螺の音
Author(s)	プラバーカル, カナイヤーラール ミシュラ; 長崎, 広子
Citation	印度民俗研究. 1993, 8, p. 21-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50299
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

夕べの^{ともしひ}燈、
夜明けの法螺の音

カナイヤール・ミシュラ・プラバーカル

^{ともしひ}燈 と法螺の音

スチエート村長

チョードリー・ビハーリーラール

ミールー・カリーファー

ドクター・ヨーチン

国の宝

訳・注 長崎広子

ともしひ 燈と法螺の音

樹木が芽生え育つように、大地に生を受け、大地から滋養を得て、空に向かって伸びた私は、大空の下で、花を咲かせ実をつけましたが、大地のまごころの恵みがあればこそ、この花は美しく咲き、この実は甘く熟れたのです。そこで、この花と実を誰に捧げようかと考えた時には、少しも迷うことなく、これらを母なる大地に尊敬と愛情を込めて置きました。

私が生まれた家庭は、どこから見てもごく平凡な家庭でした。私は、母からあまりいい影響を受けませんでした。母は、私には優しい人でしたが、よその人に対しては鋼鉄のような人でした。幼い私に初めて大きな影響を与えたのは、物静かで、愛情深く、我慢強い父の人柄でした。

父は、田舎町で祭儀を執り行なう平凡なバラモンでした。たいした学歴もなく、財産と言えるものもほとんどなく、社会的地位も平凡なものでした。しかし、父の生き方は、他の人とは異なり、人間として尊敬できるものであり、それは幼い私にもよく分かりました。親戚や一族の中には、華やかな地位を築き、社会で成功した立派な人たちが数人いましたが、その人たちの生き方には、獣のような卑しさがあり、それは、幼い私にもすぐに見て取れました。そこで、平凡さの中に非凡さを見ようとする感性が、この頃から私の中に芽生えたのです。

後に、私は多くの偉い人たちに会いました。しかし、人間性が全く欠けている人が多かったので、平凡さにこそ非凡さを見ようとするこの傾向が私の抜きがたい性質になりました。そして文学は、私にとって人生の一部であって、趣味や商売ではなく、人生の規範、今で言うところの人生の憲法のようなものでした。だからこそ、単なる空想の世界に耽るのではなく、人生における真実と美を探し求めることが、私の文学の心になったのです。

まさに、この心を励まし、導いてくれたのが、ともしひ 燈と法螺の音なのです。燈は、闇の中で見えるようにと燃やされます。しかし何が見えるのでしょうか。片や、地の果てまで広がる夜の闇、片や、僅かに身の回りを照らすだけの燈。何が見えるのでしょうか。闇は巨大で、光はちっぽけだということでしょうか？ いいえ。我々に見えるのは、「光を滅ぼした」といくら闇が豪語しようとも、光は今も生きており、消えることはないということです。つまり、燈は夜明けが近いことを確かに示しています。小さいながらも、燈の特徴でありすばらしさは、この点にあるのです。

そして法螺貝は、お祈りの際、聞きとれるようにと鳴ります。しかし何が聞きとれるのでしょうか。片や、騎馬の響き、殺戮の悲鳴の中で耳も聾せんばかりの進軍ラッパの響き。片や、弱々しいプーンという法螺の音。人生で重要なのは、戦いであって、祈りは無意味だということだけが、聞きとれるのでしょうか。いいえ。「静かに夜眠る人間は目覚めることはない」といくら戦いの鬼が吠えようとも、人のいとなみの抑え難い性質は、服従ではなく、祈りなのです。つまり、優れた性質や人格や優れた人間に対する

祈願が重要であるということが、聞きとれるのです。小さいながらも、法螺貝の特徴でありすばらしさは、この点にあるのです。

本書は、金や権力を持つ人ではなく、愛と献身で輝いている人々の思い出です。本書で私が燈と呼んだのは、光をもたらす人です。法螺の音と呼んだのは目覚めをうながす人なのです。

光。月の光、陽の光、電気。電球であれランプの^{ともしび}燈であれ、いつも道を照らします。そして、人生においてはこの人たちが^{ともしび}燈です。この人たちに照らされてどんな道が見えるのでしょうか。砂利道や階段でしょうか？ いいえ。人生の道です。

人生の道とは、それに従って生きれば、人生を誤ることのない道です。しかし、人生を誤るとは、どういうことでしょうか。人生を誤るとは、誤った価値に意味を見出すことです。人生の意味とは、徳を身に付け、謙虚に奉仕し、人の役に立つことであって、害を及ぼしたり錢に執着すること、言いかえれば、権力や富を持つことではありません。金であれ、権力であれ、地位であれ、知力であれ、人生の意味にはなりえないのです。

そして覚醒。目覚め、自覚。覚醒は人間に思考、思想、考えを与えますが、法螺貝で目を覚まし、我々は何を考えるのでしょうか。米、味噌、薪のこと？ いいえ。それは思考ではなく、ただの思案です。覚醒と夢とは違います。夢の中では、嘘を本当とし、良からぬことを良いこととし、悪事を善事と考えても済まされます。しかし目覚めている時は、嘘は嘘であり、真実は真実なのです。だから、ただ自分の利益のために生き、他人は自分のために存在すると考え、自分のためなら人の生死もかまわないなどということとは、正しい人間のすることではありません。人間の高潔さは、人のために生き、人の役に立つ人生を送ることにこそ、あるのです。

さらに明らかなことは、ひたすら自分のために何かを得ようとする人は、尊敬に値しないということです。真に尊敬すべき人は、他人のために、何か、あるいは全てを捧げる人です。その人が労務者であれ、技術者であれ、学生であれ、教授であれ、金持ちであれ、貧乏人であれ、役人であれ、一般人であれ、教育を受けた人であれ、文盲であれ、今で言うところの出世した人であれ、そうでない人であれ。

この人たちの点した燈のおかげで、私は人生の道を見つけました。この人たちの吹き鳴らした法螺の音で目を覚まし、人生の真実を知りました。願わくば、読者諸兄も、この人たちの点した燈で、自らの人生の道を見つけ、法螺の音で目を覚まし、自らの人生の真実を知られんことを。ゆえに、本書をその願いを込めて文学の殿堂に捧げます。

ヴィカース リミテッド
サハーランブル

K・L・ミシュラ・プラバーカル

原題 ‘Ye Dīp Ye Śaṅkh’

スチート村長

「お国はどちらでございますか」

ハルドワール¹に住む、猜疑心は強いが信仰の篤い、大胆なバドリー・バーヴレーが、自分の家の祭儀に加わっているひとりのバラモンの大きなギョロツとにらみつけるような目を見咎めた。

バラモンは、問われるままに名もない村の名を語ったが、旦那は、そこがどこなのか分からなかった。そこでバラモンは説明した。

「手前の里は、ラナカンディーに近いところです」

「ラナカンディーの近く、というのは、泥棒村のラナカンディーのことですかね？」

旦那はびっくりして、祭儀をとりしきるパンディットを呼んで言った。

「今日にもこのバラモンをお勤めからはずして下さい。ラナカンディーの近くに住んでいると申しておりますからな。いずれきっと、強盗の手引きでもやりますわい」

貧しいバラモンは、ラナカンディーの近くに住んでいるという理由だけで、日当1ルピーと御馳走をいただけなくなってしまった。これは一九世紀の終わり頃の話である。

ラナカンディーは、サハーランブル県²デーオバンド郡にある大きな村だ。ここの主なカーストは、ラージプート族³である。マハーバーラタの戦跡の碑がここに建てられたことで有名で、この名もそこに由来する。しかしこれは昔の話で、二〇世紀初頭の二十年あまり、ここの村人たちは泥棒と強盗を主たるなりわいとしていた。日が暮れて二時間もたつと、勇敢なラージプートは、一団となってあちこちへ行き、夜の明ける二時間前には戻って来る。この短い時間に、どれほど多くの家の^{ともしび}燈が消え、光が闇に変わったことだろう。

近隣の県まで、ラナカンディーの悪名はとどろいていた。警察署長の馬、地主自慢の牛、大商人のお内儀の宝石、金貸しの金庫は、常に危険にさらされていた。嫁や娘を連れてラナカンディーのそばを通り抜けることは、不可能だった。辺りの村の住民は皆、ラナカンディーに怯えきっていた。

その頃の物騒な話が言い伝えられ、今でも人々は忘れないでいる。それによると、その当時でもラナカンディーのラージプートには、ある流儀、独特の「男気」があった。

ジェート月⁴の真っ昼間、喉がからからに乾いたラナカンディーの男がひとり、どこからかやって来た。途中の村の一軒の家の軒先で、若い娘が糸を紡いでいた。彼は、普段の言葉遣いのまま、娘に話しかけた。

「ちょっと、姉さん。少し冷たい水を飲ませておくれ」

¹ インド北部、ウッタル・プラデーシュ州北西端にあるガンジス上流のヒンドゥーの聖地。ヴィシュヌ神へ通じる門戸を意味し、全国から巡礼者が訪れる。（「南アジアを知る事典」平凡社）

² ウッタル・プラデーシュ州の都市。デリーの北、約140キロ。

³ 西部および中部インドにいくつかの政権をたてた尚武の種族。武人としての誇りが高く、騎士道精神が尊ばれ、女性には貞潔が強く求められた。（「南アジアを知る事典」平凡社）

⁴ インド暦第三月、陽暦五～六月にあたる。

娘は、虫の居所でも悪かったのか、むっとして言った。

「お水どころか、シロップだってあげるんだけどね」

馬鹿にされたラージプートは、村に帰る道すがら、こう聞き込んだ。大工^{バライー}（カースト）のこの娘は結婚式を挙げたばかりで、来月花婿が迎えに来ることになっている。嫁ぎ先の村へ行く道は、ラナカンディーのすぐそばを通っていた。

花嫁を連れて行く日 came。娘は出発し、牛車がダークの木⁵の下を通りかかった時、誰かが棍棒で御者の肩を殴りつけた。御者が転げ落ちると同時に、牛が止まった。すると、牛車のそばに現われたのは、ラナカンディーのラージプート。花婿と花嫁は呆然とするばかり。

「心配するな。殺しはせん」ラージプートの言葉。

「宝石でも、金でも、服でも、鍋でも、どうぞ差し上げます」花婿が哀願する。

「いや、そんなもんはいらぬわい。今日は、お前にくれてやる。俺が欲しいのは、嫁っこだ」これがラージプートの宣告だった！

花婿は震え上がり、花嫁はベールの下でますます怯えた。突然、花嫁はラージプートの方をのぞいた。男があの日⁶のラージプートであることに気づき、何を思いついたかそちらを向いて、自分の顔を覆っていたサリーの端を引上げ、手を合わせて言った。

「弟のお前さんがいるんだから、もう、あたしは誰も恐くないわ」

「冗談じゃねえ。お前の弟だって！」

怒ってラージプートは言ったが、この時、絶望の淵に立った時に沸き起こる勇気で、花嫁は男の言葉をさえぎった。

「だって、お前さんはあの日、あたしのこと『姉さん』って呼んでくれたじゃない」

ラージプートの肩から力が抜けた。人から奪って腹に巻いた5ルピーを取り出し、花嫁の手に載せると、男は、むき出しになった顔をサリーの端で覆ってやった。この男は、死ぬまでバイヤードゥージュの祭日⁶には、かかさずこの『義姉』のところへ出かけて行った。

*

デーオバンドに、バグワーンダースという名の警察署長がいた。金儲けがうまく、惜しまず使い、馬道楽だった。彼の黒馬は、白鳥のように歩き、乗り手の腹が揺れることもなく、思わず見惚れてしまう。馬好きに言わせると、「蠅も滑る」というやつだった。

ある日、郡役所の外で、馬丁がその馬を乗り回していると、田舎者がひとり、そこに立ってじっと馬を見詰めていた。馬丁は男に二度立ち去るように言ったが、男はそこか

⁵ *Butea. frondosa* 和名ハナモツヤクノキ。マメ科の小木。葉裏灰白。花は外面淡紅、内面濃赤。バラモン教の聖木。ラック虫の飼料木。（「図説熱帯植物集成」廣川書店）

⁶ カールティク月（インド暦第三月）白半月の二日に行なわれる祭り。姉妹が兄弟にご馳走し、ティラクを付けたりする。

ら離れず馬を見詰めていた。その頃は、署長の馬丁も自分をひとかどの者と思っていた。三度目に、少し怒って言った。

「どこから来た？」

「ラナカンディーよ」

口には出さなかったが、見物人を泥棒扱いして、馬丁は言った。

「帰れ。お前に用はない。馬小屋には、風が入る隙間もない。お前なんぞにゃ絶対入れぬわい」

見物人は、とても冷ややかではあるが、自信に満ちた口調で答えた。

「入れるか入れねえか、お前の知ったことじゃねえ。その気になったら、風が入れねえところでも入る人間はおる」

十日あまり後、朝起きて馬丁が馬小屋の鍵を開けると、何と、馬が消えていた。夜九時に馬に飼料をやって、馬丁は自分で鍵を掛けた。朝、鍵は掛かったままだった。しかも扉にベッドをつけて寝た。夜起きてどこにも行かなかったのに、馬は一体全体どこに消えたのだろう。

知らせはまたたく間に広まった。警察署長がやって来て、副署長がやって来て、秘密警察もやって来て、あの人もこの人もやって来た。馬丁は同じことばかり繰り返す。

「署長殿、馬はどこへ行ったのでありましょうか」

そして警察署長は同じ質問ばかり。

「馬がどうやって出て行ったのだ」

馬小屋には風を入れるために、奥の壁に小さな窓がひとつあった。秘密警察の旦那が言った。

「この窓から馬は外に連れ出されたのだ」

これを聞くと思わずみんな笑った。が、警察署長は怒って言った。

「子兎じゃあるまいし、すると何か、シーッとと言っただけで馬が窓から飛んでたって言うのか！」

その時、馬丁はあのラナカンディーのラージブートを思い出し、みんなに話した。馬はラナカンディーに行ったということで皆の意見が一致し、三時間後に警察はラナカンディー村を包囲した。その上で、水溜まりの蛙一匹見逃さぬ勢いで家々を搜索した。しかし、馬は見つからなかった。

村長の家の集会所で署長はいらいらして座っていた。すると、ひとりの男がやって来て言った。

「旦那。風も入れないような所につないだ馬を、誰が盗んだのかねえ」

署長の脳裏にパッと閃くものがあり、立ち上がり、男の手をつかんだ。しかし家から逃げる泥棒をつかまえるためではなく、家にやって来た客と握手するように。そして言った。

「分かった。負けた。君の勝ちだ。もう教えてくれてもいいだろう。馬はどこだ」

その男は署長を連れ、路地を通して自分の家に行き、階段を上がり屋上に出た。屋上には牧草の束が備え付けてあった。男が片方から牧草を方々に投げると、署長は見た。牧草の囲いの中に、四つ足と口を縛られて、彼の黒馬が横に寝かされていた。

「連れて帰ってくれ、おまわりさん。あんたの馬だ」男は言った。

しかし馬を屋上に上げたことさえ何とも不思議なことなのに、やっかいなのは今度はどうやって下ろせばいいかということだった。結局上げた男が地面に下ろし、馬は集会所に連れて来られた。

「さあ。鍵の掛かっている部屋からどうやって馬を出したのだ。教えてくれ」

署長はからくりを知りたがり、男にためらいはなかった。

「後ろの小さな窓から出した」

しかし、全ての者はサーカスの芸人でもこんな芸当はできないと思った。

機嫌良く全員が村を離れると、副署長が言った。

「泥棒を逮捕しましょう。盗品は戻ったことだし」

笑って署長は言った。

「あの男が盗みを働いたわけじゃなし、我々も盗品を取りかえしたわけでもないのに、逮捕とはどういうことだ」

「どうして泥棒じゃないのですか」

「鍵はそのまま閉まっているし、馬はいない。これは泥棒の仕業か、はたまた魔法か。それに、あの男には男気があるじゃないか。馬のありかを自分で言って、私に条件ひとつ付けるじゃなし、保障を取り付けるわけでもない。逮捕することはない。私は、そのうちあの男に盛人にご馳走してやろうと思っているよ」

*

時代が下がって、ラナカンディー村にひとりの男が生まれた。男はこの村人かたぎを見抜き、自らの知恵で高めた。これがスチュート・シン村長である。

スチュート・シンは、一九世紀の終わり頃ラナカンディー村のラージプートの家庭に生まれた。一体どのようにしてウルドゥー語の教育を受けたのかは分からないが、読み書きができた。学者と付き合う機会もないはずなのに、彼は才能の蔵で、びっくりするほど優れた頭脳の持ち主だった。もし今日の高等裁判所を王制の世の慣習に変えるなら、つまり法律の代わりに裁判官の判断力が優先されるなら、スチュート村長はどここの裁判所でも尊敬されうる裁判官になれるだろう。

実に、自分の村では彼は高等裁判所そのものだった。どれほど多くの争い事を彼はいつも簡単に解決したことだろう。彼が村長になる以前は、ラナカンディー村では裁判沙汰が絶えなかった。しかし、その影響力と公平さと無言のおしえで、村では裁判沙汰が全くなかった。

一九二四年から二五年にかけて、北インド地方で強盗が横行し、列車の乗客がまるまる強奪されたことさえあった。警察は村々をまわり、疑わしい者を逮捕した。ラナカンディー村にも警察がやって来て、村長に村のごろつきのリストを要求した。村中が震え上がったが、村長は落ち着いた声で言った。

「うちの村に、ごろつきはおりません」

ラナカンディー村にごろつきがいないとは、驚くべきことだ。警察がもう一度同じことを繰り返すと、村長は言った。

「ここにひとりだけごろつきがおります。私です。何なら私を逮捕して下さい」

署長の眉が吊り上がった。が、我らが村長も、息を入れると破裂する風船玉のようにやわな男ではなかった。そこで、怒りを押さえて署長は、少し嚇しをかけて言った。

「ラナカンディーに、ごろつきがたったのひとりもいないなんて話しが、通っているのか」

村長の目は署長の腹の内を見透かした。そしてよく効く薬をお見舞いした。

「旦那。俺は冗談を言うつもりはない。本当にうちにはごろつきはおらん。信じられなかったら、報告書を見れば分かるだろう。ここ三年、村の名前が挙がったこともないし、数年来、裁判沙汰は一件もなかった」

署長の目から鱗が落ち、空の手錠をぶら下げ、帰って行った。

よその村の村長たちは、御上から便宜を計ってもらうために、村の若者を十人やそこらは監獄に送り込んだ。しかし、スチュート・シンの才知と恐れを知らぬ性格は、村の若者を守っただけでなく、村の名声を何倍にも高めた。その後、ある時私がその勇気と知恵を誉めると、彼は言った。

「まともな人間をまともと言うことが勇気だなんて。そんなこと書いた本が、ありますか、先生？」

彼の頭脳がいかほどのもので、いかなる方法で争いを解決していたかを説明するには、例をひとつ挙げれば十分だろう。ラナカンディー村と接して、ある村があった。二つの村の境に、ラナカンディー村の油搾り（カースト）の畑があった。テーリーはそこに小屋を建てて住んでいた。ある日、何者かがテーリーの小屋の前で、水牛を痛めつけた。血がまだそこに残っていたので、村人たちは彼に疑いの目を向けた。村長の影響力が強かったのも、ラナカンディーの男によそ者は手を出せなかった。そこで、村人たちはこの不満を村長にぶつけた。

村長は現場にやって来た。その時、まだ血がそこに残っていた。が、テーリーが言うには、「この事件があった日、俺は出ていてうちにはいなかった」。村長は二、三十分そこに立って考えつづけた。次に彼は、かがんで地面をととても丁寧に見た。そして走って、この事件が起きたフトモモの木の下に行き、そこを長い間見つめていた。

それから彼は、その水牛の持ち主の村に行った。途中、水牛の件と自分がそこに行くことは関係がないというように、しゃべっていた。村に到着してもとりとめのないよも

やま話しをつづけ、何気なく太綱を借りたいと言った。

もう水牛のことは忘れて、村人たちは自分の太綱を持ってきて村長に見せ始めた。村長はそれを見て、気づかれないようにそっと匂いを嗅いだ。ある皮職人^{チャマール}（カースト）の持参した綱を見て匂いを嗅ぐと、笑いだした。そして太綱の持ち主の二人のチャマールの兄弟を呼んだ。彼らがやって来ると、村長は村人たちに言った。

「さあ、みんな。こいつが犯人だ。あの水牛を殴った奴らだ」

村長は、たった五分で「あの水牛がうちの畑を荒らしたので、腹が立って殴ってやった」と二人に白状させた。

私は村長に尋ねた。

「どうして分かったのですか」

村長はにっこりして答えた。

「あんな頑丈な水牛を、ひとりやふたりの男に殴れるはずはないと思ったんだ。つないでおかなかったら、一発殴られただけで森に逃げ込んでしまうだろう。木にくくりつけてから、あの水牛を殴ったとしか考えられない。思ったとおりだよ。フトモモの樹皮が剥がれていたからな。フトモモの匂いがずっと残ることを知っていたから、水牛をくくりつけて殴った縄が見つければ、必ずフトモモの匂いが付いているはずだし、樹皮の色も付いているかもしれない。こう推理して、俺はあの村の太綱を見せてもらい、一件落着というわけだ」

彼は、県の裁判所の判事補佐で、よく裁判を聴いていた。ひとりの裁判官が、ある時言った。

「彼の意見はとても鋭くて、おかげでとても助かった」

裁判官の言葉によれば、「判事補佐どころか、裁判官そのものだったよ！」。

ある日、彼は手に盆を持って村の家々をまわっていた。盆にはローリー⁷、米粒、果物がのっていた。それは礼^{プーシャー}拝に用いる盆で、あらかじめ種銭ともいうべき金がいくらか供えられていたが、家々を回るうちに少しづつ増えていった。

私はその時、偶然村を訪れた。最初に会った者が言うには、

「世間じゃバラモンに雌牛のお布施というのはあるけど、今日、うちの村長は、特^{こつてうし}牛にまでお布施を上げてなさる」

つまり、村の貧しい青年に結婚式を挙げてやるための寄付金を集めていたのだった。

そこで、私は村長に言った。

「みんなこの寄付集めの件では、村長にひどく腹を立てていますよ」

「もう、誰が腹を立てようが、かまわん。仕事は済んだ」

しばらくして、村長は言った。

⁷うこんと石灰を混ぜて作った赤い粉。吉祥のものであり、額に付ける。

「先生、村であいつに嫁をもらってやらなかったら、村の嫁さんや娘に目をつけるようになるだろう」

私はよく、スチェート村長はなんて実際的な人なのだろうと思ったものだ。

これほどのことを村のためにしながら、村長はあくまで謙虚だった。自分が全てしたことでも、他人に功績を譲っていた。彼はとても低い声で話した。耳を澄まさねばならないほど、低い声で。彼の一言一言がとても的を射ていた。どんなことでもとっさに判断を下した。彼は背が高く、痩せていて、秀でた額に、大きな目をしていて。ウルドゥー訳で哲学書を読み、時々、びっくりするような質問をした。

彼の考え方はとても寛容だった。アーリヤサマージ⁸の人々は、彼を仲間だと信じ、保守的な人たちは人たちで、仲間だと思っていた。どんな出来事にも、村長の目が十分行き届いていた。何か起こると、常に中心になって働いた。ラナカンディーが理想的な村になることに、彼の目的があった。

無知と貧困の当時に、村で何か新しいことを始めることは、何であっても容易なことではなかった。しかし彼のやり方の特徴は、仕事を他人にさせることだった。他人に仕事を始めさせ、彼が完成にまで持っていった。

一九二七年から二八年にかけて、私は初めてラナカンディー村を訪れ、村長に会った。私の目的は、そこにサンスクリットの学校を開校させることだった。私の話を聞くと、すぐに彼は言った。

「学校を開きたいのか、それともただぶらりと来ただけかい？」

「いいえ、どうあっても開校するのです。田舎で学問を広めるのです」

彼は言った。

「それじゃあ、誰にも会わずに、今日のところは黙って帰りなさい。数日したら、また来なさい。別の部落の集会所に泊まって、そこの世話役に話して、世話役を通じて集会を召集してもらいなさい。開校できるだろう。でも、私が先生に会ったことは言わない方がいい」

私はそのとおりにした。別の部落で会議が召集され、私は全ての人に学校の利点を説明した。村長はそれに少し反対し、途中で起こる問題を話題にしたが、この反対は全て見せかけだけのものだった。彼の意図は、実際に反対する者を世話役につけることだったのだ。彼の策は効を奏し、盛大に学校が開かれた。

一年後、この学校の祝典が催され、三日間にわたり千五百人ほどの人々が出席した。ヴェーダに則った祭儀が行なわれ、講演があり、賑やかだった。祝典が終わると、村の主な男たちはスチェート村長の家の縁側に座って、祝典の成功について話していた。誰かが言った。

「今まで聞いたこともないほど祝典はうまくいったけど、寄付金は少なかったな」

⁸ スワミー・ダヤーナンド・サラスヴァティー (Svāmī Dayānand Sarasvatī, 1824-1883) が創立したヒンドゥー教改革団体。

みんながうなずいて、金が足りないという話になった。

低い声で村長が言った。

「そんなことを、上に立つ男は考えるものじゃない」

みんな黙り込んでしまい、私は静かに尋ねた。

「じゃあ、上に立つ男は何を考えるべきなのですか」

「祝典で村の名が上がったか下がったか、よそから来た客の歓迎がちゃんとできたかできなかったか、ラナカンディーであったことを自分の村ではできなかったと客が思ったか思わなかったか。こういうことを上に立つ男は考えるものだ」

この広い視野が、スチュート村長の人生の活力の源だった。それによって、彼は自分の村を発展へと導いたのだった。

彼の目には、自分の村以外のことは何も映らなかったのだろうか？ ある日、偶然この答えが分かった。

一九三〇年、サティヤーグラハ運動⁹が繰り広げられていた。ある夜、私は村長に言った。

「もう、村長もこの運動に参加してはどうですか」

村長は低い声で言った。

「ただ参加するだけじゃあ、おもしろくない」

とても静かに、私は訊いた。

「じゃあ、どうなさるんですか」

さらに低い声で村長は言った。

「やるなら、村中でやる」

この話はここまでだった。朝、私が出向いた時、村長は言った。

「今ここで運動が終わるわけじゃない。見ている、いつか俺たちの出番も回ってくるだろう」

「じゃあ、期待してもいいのですね」

「ああ。徹底的にやるか、何もしないかだ」

村長は手を合わせ、私の馬車は出発した。これが、村長と話した最後だった。数日後、私は刑務所送りになり、村長は伝染病にかかって天に召された。

この大きな誓いは、死によって果たされなかった。しかし、村長の生前の業績だけでも、何の不足があるだろう？

村長を思い出すと、あの光景が目の前に浮かんでくる。私が馬車に座って、村長が手を合わせている。

「ああ。徹底的にやるか、何もしないかだ」

この「徹底的に」という言葉が、謎を含んだままになっている。これを説明するため

⁹ 真理（サティヤ）の把握（グラハ）の意で、ガンディーの政治闘争の理念。1930年、ガンディーはイギリス行政の象徴である塩税の侵犯に始まる第二次サティヤーグラハ闘争（塩の行進）を指導。

に、村長が我々と共に生きつづけてくれたなら、ケーラー¹⁰、チャンパーラン¹¹、パールドーリー¹²といった誉れ高い名に、ラナカンディーの名も連ねることができたのではないかと、悔やまれてならない。

原題 ‘Mukhiyā Sucet’

チョードリー・ビハーリーラール

「カナイヤーラール君かい？」

「はい、そうです」

「そうか、わしはビハーリーラールだ」

顔に見覚えもなければ、名前も聞いたことがなかったが、竹馬の友のような態度。この人は誰だ？ 私は考え、それから注意深く男の方を見た。肌は真っ黒で、目は大きくくりくり動く。笑わなくても笑みをたたえた唇。パーンの赤黒い渋が染み付いた歯と歯ぐき。長身で痩せた体。容姿は整っていなかったが、魅力的な人柄。手織り綿がまぶしい指導者の風格をそなえた人物。

お茶が出され、話が始まって分かった。この人は、デーヘラードゥーン¹³に住むチョードリー・ビハーリーラールというハリジャン¹⁴の指導者で、私の郡から連合州¹⁵の州議会に立候補を予定していた。チェーンスモーカーで、一本吸いおわるかおわらぬうちに次の一本に火を点け、すばすばと吸い込むのだった。私は言った。

「イギリス人をこの煙で吹き飛ばしてやって下さいよ、チョードリーさん」

「イギリス人は後でも吹き飛ばせようが、議席を取るのが先だ」

その時の大声といったらなかった。何年たった今でも、その顔が目に残り、笑い声は耳にこだましているほどだ。

これは一九三六年十月の出来事で、その頃、インドはその将来を決定づける選挙を戦う準備をしていた。

刀を持てば誰でも勝つが、賞賛すべきは素手で勝つ人だ。チョードリー・ビハーリーラールは、そういう勇者のひとりだった。インドのライダースィー・チャマルというハリジャンのカーストに生まれた。

¹⁰ グジャラート州。1917年のサティヤーグラハ運動をガンディーが指導。農民による地税不払い運動が繰り広げられた。

¹¹ ビハール州チャンパーラン県。1917年のサティヤーグラハ運動の地。インディゴ(藍)小作争議が繰り広げられた。ガンディーはアヒンサー(非暴力)の原則を貫徹して解決。

¹² グジャラート州スーラット県。1928年のサティヤーグラハ運動の地。地税不払いの農民運動をバテール(Vallabhbhai Patel, 1875-1950)が指導した。

¹³ ウッタルプラデシュ州北西部の県。ヒマラヤに近い山合の地。

¹⁴ 不可触民。インドのカースト社会で四つのヴァルナ(種姓)の枠の外に置かれてきた最下層民。神の子を意味し、ガンディーが使用した不可触民に対する名称。

¹⁵ アーグラ・アウド連合州のこと。

その後、インドの状況そのものが一変し、どの窓からも光が降り注ぐようになったが、二十世紀初頭は、そういう状況ではなかった。当時は、このカーストの男の子が勉強しようという意欲を出すことさえ罪であった。しかし、ビハーリーラールは暗黒に飲み込まれるような男ではなく、それを飲み込むために生まれた男だった。障害となる黒い壁があっても、決してたじろぐことのない男のひとりだった。障害と戦い、それを乗り越え、ヒンディー語、ウルドゥー語、それに英語の教育を受け、政府の測量局¹⁶に職を得た。御上の椅子をチャマルが占めるとは、当時では考えられないことだった。

一九二〇年になると、ガンディージー、すなわち、マハートマー・ガンディーの嵐が吹き荒れた。インドは一変し、母なるインドは忠実なる息子に呼びかけた。ビハーリーラールは、その日イギリス人上司の机の前に立ち、一枚の紙を差し出した。

「どうした、ビハーリーラール？ 昇進させて欲しいのか」

イギリス人の上司が気取って尋ねると、すました様子でビハーリーラールは言った。

「はい、そうです。そろそろ昇進したいと思っています」

「君の仕事ぶりにはとても満足しているぞ。君を特別昇進させよう」

上司が親しげに言うと、ビハーリーラールは言った。

「御親切ありがとうございます。でも、私は自分の昇進を望んでいるのではありません。我が国の昇進を望んでおります。これは昇進願いではなく、辞職願いであります」

上司にとって、これはまさに青天の霹靂だった。彼はチョードリーを説得し、すかしたり脅したりしてみたが、国家への奉仕の情熱が説得や脅しで冷めるはずもない。チョードリー・ビハーリーラールは仕事を辞め、運動に飛び込んだ。もはや、彼は御上に仕える卑屈な小役人ではなく、真っ赤に燃えさかる火の玉だった。演壇に立てば人々の目を奪い、雷鳴のような大声は聞く人の耳朵を打った。実に、その弁説は一面に火を降らせ、民衆は熱い思いで迎え入れた。

ビハーリーラールの手に手錠がかけられようとした時、ガンディージーが運動を中止した。¹⁷しかし、ビハーリーラールは踏み出した足を止めるような男ではなかった。今度は、インドの建設的活動に従事した。不可触民を組織し、彼らに教育を広め、禁酒やその他諸々の仕事に、身を粉にして働いた。

つむじ風は燈を消すが、反乱は心の燈をいっぱい点す。ビハーリーラールも反乱の火で燃え立った^{ともしび}燈であったが、彼がぱっと燃え上がっては消え去る^{ともしび}燈ではなく、燃え出せばずっと燃え続ける燈であることを、時が教えてくれた。つまり、火を点けられると燃え上がり、消されると消え失せるありきたりの火皿ではなく、彼の人生には独自の炎が燃えていたのだ。彼は、人生の大空に光り輝く星座だった。

民族主義の潮が引くと、コミューナル騒動の火が燃え上がった。モスクの前でヒンドゥー教徒が楽を奏でることが問題となった。そしてヒンドゥー教徒とイスラム教徒間の暴動

¹⁶ イギリス東インド会社が領域支配のために土地測量と地図製作をさせた局。

¹⁷ 1922年、チャウリ・チャウラー事件で非暴力の原則が崩れるのを恐れたガンディーは、非暴力不服従運動の停止を宣言した。

の波が押し寄せた。大物達が押し流され、流されなかった者は座り込んだが、一九二五年のある事件がビハリーラールはまだへこたれていないということを教えてくれた。

当時、地方自治体ではハリジャンが一名政府によって任命されて議員になっていた。しかしチョードリー・ビハリーラールは、留保のないカーストヒンドゥーの議席を争って選挙に出ることを宣言し、堂々と議員になったのだ。彼は、選挙によって地方自治体で一般議席の議員になった全インドで初めてのハリジャンだった。これは、民衆によってチョードリーという人物の人柄が受け入れられたことを示すものに他ならない。

実に、今やビハリーラールはデーヘラードゥーンや連合州ばかりでなく、全インド的な人物になった。ハリジャンの間では、単なる人物というだけでなく、全インド的指導者となっていた。彼はガンディージーが最も信頼する兵士であり、インド社会を導いたラーラー・ラジパット・ラーイ¹⁸にとって、友人以外の何者でもなかった。

アジメールでラージプターナーとマールワール地方のハリジャンの集会が開かれ、その議長に彼が選出された。議長としての彼の演説は、インド中の新聞に掲載され、あらゆる所で賞賛された。コミュナル闘争たけなわのその地獄のような時代にも、彼はあの一九二〇年と同じ調子で生きているようだった。その演説はあまりにも熱のこもったものだったので、逮捕されるという噂まで数日間流れたほどだった。

チョードリー・ビハリーラールがハリジャンの問題をすでにその当時でも大きな視野で見えていたことは、大したことである。彼にとって、ハリジャンの問題は、ただ自分の階層の問題ではなく、全インドの問題だった。だからこそ、連合州の労働者の集会がラクノウで開催された際に、その議長にも選ばれたのだった。その広い視野で、彼は踏みにじられ抑圧された人たちの代弁者となったのだった。

ビハールで全インドのライダーシー・ハリジャンの集会が開かれ、その議長としてチョードリー・ビハリーラールは言った。

「ハリジャンの問題は、インドが蘇生するか否かの問題であります。インドが蘇生するか否かは、全世界の踏みにじられ抑圧された人たちの問題でもあります。我々はそれを解決せずに、どうして平和に暮らしましょうか」

インドの様々な党の全政党協議会が召集された。チョードリー・ビハリーラールは不可触民の代表としての責務を見事に果たし、マダン・モーハン・マラーヴィーヤ氏¹⁹はすっかり惚れこんだ。

マラーヴィーヤ氏は、人目をはばかりことなく彼の肩を叩き称えたばかりでなく、抱き寄せまでしたのだった。しかし、マラーヴィーヤ氏は当時ヒンドゥーマハーサバーを指導しており、チョードリー・ビハリーラールはそのような雰囲気には溶け込むことができなかった。そのためこの親交はごく短い間続いただけで、絶えてしまった。カースト、

¹⁸ (Lājpat Rāi, 1865-1928) パンジャープ出身。1880年代から1920年代にかけての政治指導者、社会改革者。「パンジャープの獅子」と称せられた。

¹⁹ (Madan Mohan Mālaviya, 1861-1946) インド国民会議派。穏健派。1906年、ヒンドゥーマハーサバーを設立。1931年円卓会議に参加。ベナレス・ヒンドゥー大学の創始者。

宗教、階層という視野で見るとは、ビハーリーラールのように国家的視野を持った人物には無理であった。彼は県の会議派委員会の委員長、会議派全国委員会の委員、市会の副議長として自分の仕事を続けた。

平和の時であろうと、革命の時であろうと、チョードリー・ビハーリーラールはじっとしておられず、仕事をする男であった。サイモン委員会の来訪²⁰により、眠っていたインドの情熱の嵐が再び巻き起こり、「サイモン帰れ」のスローガンでインドの空気は震撼した。彼は、今日はここにいたかと思えば明日はそこ、日夜委員会ボイコットに熱中した。そこで彼の熱意と能力が共によく発揮され、ラーラー・ラジパット・ラーイは彼を絶賛した。

約十年の間、運動が沈滞し、一九二四年から二八年まで激しいコミュナル暴動の魔力がインド中に広まった。そのため、インドの民族意識は消えたというイギリス側の錯覚は、委員会ボイコットの炎に燃やされてしまった。すると、イギリス側はインドのヒンドゥー勢力を永久に抹殺する新たな策謀をこらした。それは、不可触民のアーディ・ヒンドゥー運動だった。

この運動のスローガンは、不可触民がインドの先住民であり、ヒンドゥー教徒はよそからやって来て力づくで先住民を不可触民に仕立てたというものだった。これはインド人の民族意識に振りかけられた猛毒であった。この運動の指導者のひとりがスワミー・アチューターナンドで、その主な活動地域は連合州であった。州知事の指示で全県のイギリス人県長官と警察がスワミーを支援した。

ラーラー・ラジパット・ラーイと共に、チョードリー・ビハーリーラールはこの運動を調査し、次にこれを粉碎するための戦いに挑んだ。夜も昼もなくいかさま師たちの活動を打ち砕いた。運動は粉碎され、インドの民族主義は強烈な衝撃から守られた。

そして一九三〇年の運動が始まり、チョードリー氏の一九二〇年から満たされなかった願望が満たされた。つまり、刑務所に送られ、一九三二年のトマス・ウィリンドン総督²¹の大弾圧では、長い監獄への旅に出ることになったのだ。ある時、彼は言った。

「刑務所で健康は害したが、とても楽しかったし、本当言って、囚人になっていなかったら、わしは自分の人生までも価値がないと思うだろう」

ブー、ブー、ブッ、ブッ。

ヴィカース社の事務所の前に、朝早く、一台の車がクラクションをけたたましく鳴らすので、苛立って私は表に出た。すると、車の後部座席にチョードリー・ビハーリーラールがとても偉そうにふんぞり返っていた！

「どうしたのですか。どうして中に入らないのですか」私は尋ねた。

「見えんかね、わしは車に乗っているんだぞ」

²⁰1919年インド統地法で統地法設定委員会を設けることが法定されたのをうけ、1927年、イギリスがサイモン委員会を任命。インド人が含まれていなかったことから、会議派は反発。1928年、委員会のインド訪問で全国で同盟罷業（ハルタル）とデモが行われた。

²¹Thomas Willingdon. 1931年から1936年までインド総督。鉄血政策で知られる。

と言うと、笑いながらすごい勢いで突進して私に抱きついたので、私は立ってられないほどだった。

食事をして、車に乗って村に出掛けた。ある村のそばで、彼の対抗馬の候補者であるチョードリー・バハードゥル・シンが選挙人名簿の包みを肩にかついで歩いているところを見かけた。ビハーリーラールに言うと、彼は言った。

「なんだと、あいつは歩いて村を回っているのか」

そして彼のそばに車を止めさせ、降り立った。

「チョードリーさん、わしはビハーリーラールです。この県から出る連合州の州議会選挙では、会議派の推薦を受けております」

そして、ビハーリーラールは古くからの友人であるかのように、彼と挨拶を交わした。自転車が壊れたので、シン氏は歩いていたのだった。ビハーリーラールは是非ともと言って、シン氏を車に乗せ、7マイル行ったところで下ろして戻ってきた。彼は、自分と対立する候補者の熱意と勇気を常に賞賛し、選挙に勝った後、ある日甚だ丁寧にレストランでお茶を御馳走した。

「わしの背後には、会議派の力があり、友人の支援、経済支援がある。それでも、この男はたったひとりで全部の村をわしより先に回っていた。わしはこの男に選挙では勝っても、心では勝てない」

彼は、常に同志バハードゥル・シンを誉め、会うと必ず近況を尋ねていた。

チョードリー・ビハーリーラールは本当にすばらしい人だった。人を尊敬することを知っており、人を愛することを知っていた。そして、人を使うということを知っていた。自然体で、うぬぼれず、高慢でもなかった。彼は指導者でありながら、一介の運動員であり、運動員でありながら、指導者であった。

選挙は勝利を収めた。内閣が組織された。ビハーリーラールは間接税務局の次官に選ばれた。彼のそばには今では赤い毛織りの上着を着た従卒がひかえるようになった。彼は政府の役人ではあったが、全ての人に対する態度は、いつもの打ち解けたものだった。

一九三八年の会議派大会に行く途中、病に倒れ、一九四〇年、四十二才の若さで亡くなった。四十二才という年齢は死ぬには若すぎたが、自分の仕事は果して去った。土に返る前、自分の全てを母なる大地に捧げ尽くした。氏に会ったことのない人は、ウッタール・プラデーシュ州の大臣で、弟のチョードリー・ギルダリーラールの瞳と笑顔の中に、同氏の面影を垣間見ることができるだろう。

原題 ‘Caudhari Bihārīlāl’

ミールー・カリーファー

試験は十九日後に迫っていた。学生は必死に勉強し、教師も夢中になって教えていた。昼が昼であるのはもちろんだが、夜もほとんど昼のようだった。彼らは試験の成績を上

げること余念がなく、「優」を取ることに取りつかれていた。アートマラーム・シャルマーが「優」を取るだろうと私は確信していたが、その日の夕方、ぶらぶらする左手に右手を添えて、私のところにやって来た。

「どうした」

私が尋ねた途端、彼は泣き出した。別の学生が言うには、フットボールの試合中に転んで、その上にバーンガルーが乗ったらしい。骨が折れているようだった。実際、手はぶらぶらしていた。すぐにミールー・カーリーファーを呼んだ。手を見て、彼は言った。

「先生。二本共、骨が折れてます」

聞いた途端、私は気が遠くなってしまった。それでも、私はカーリーファーに言った。

「試験は十九日後だから、この手を九日で直したら、たいしたものだ」

彼は安請け合いするような男ではなかった。

「やってはみますけど、先生、あとはみんな神様の思召しですよ」

九日後に添え木をはずすと、手は完璧に真っ直ぐつながっていた。が、カーリーファーの命令は、「骨はまだ柔らかいので、ちょっとでもぶつかったら、手を痛める」とのことだった。悪戯盛りの学生たちのこと、友達がアートマラームをちんばをもじって「てんば」と呼んだので、彼は力のあるところを見せつけた。骨は衝撃を受け、手は曲がり、おまけに少し疼き始めた。

メーラットに試験を受けに行った時、私は州一番の名医シュリー・ブーパール・シン先生に彼の手を見せた。シン先生は、十五、六分、丁寧に診察した後言った。

「骨が曲がってついています。誰がこの手を接骨したのですか」

「ミールー・カーリーファーです」私はびくびくもので答えた。

「その男が病院の責任者ですか。この頃の外科助手ときたら、こんなことしかないんだから。何でもいい加減だ」

「ミールー・カーリーファーは医者じゃありません」

「じゃあ、何ですか。アラビア医ですか」

「いいえ」私は戸惑いながら言った。「人夫です。でも、接骨がとても上手いのは確かです」

シン先生は怒った。

「失礼ですが、あなたは学問がおありの方とは思えませんね」

悪口を言われて嬉しい人があるだろうか。私も癪に触ったが、本当のことだったので我慢した。

「確かに、迂闊でした。でも先生、手はどうなりますか」

「どうもこうもありません。もう真っ直ぐにはなりません。痛みは消えます。薬を出しておきます。あなたは生徒ひとりの人生を台無しにしたのですよ」

デーオバンドに戻ると、私はカーリーファーを呼んで、嫌味を言われた怒りをぶちまけた。医者に言われたとおりのことを言った。彼はじっと座って、まるでお坊さんの説教

を聞くように話を聞いていた。終わると言った。

「分かった。さんざん悪口を言ったことだし、その続きはもう後にしてくれ。俺は仕事に行かなきゃならん。つまり、何が言いたいんですか」

私はシン先生との話を全て彼に話して聞かせた。聞くと、彼は笑って言った。

「医者に骨の何が分かる。先生、あいつらみんな馬鹿だ。キニーネのことだけ知ってる。混ぜて飲ませて、おしまいだ」

医者をこきおろすのを聞いて、いくらかすっきりした。期待を込めて、私は尋ねた。

「じゃあ、この手は治るのかい」

「治るってどういうことです。何も悪くないのに、腕白坊主がせっかく治った骨をぶつけて曲げちゃった。本当にとんでもない子だ。四日固定したら、柔らかくなって元の場所に収まるだろう。先生ったら、本当におおげさで困るなあ」

私が信用しないのを見て、カーリーファーは少し怒った。

「先生、この手が治らなかったら、今日から骨接ぎ業は廃業する。だいたい、何でも治すのは神様なんだ。俺は一生懸命やるだけだ」

私は心理学の学生のように、カーリーファーの顔をじっと見た。それまでには見せたこともなかったような自信がみなぎっていた。ジャヤドラタを殺す誓いをたてた時のアルジュナの顔も、こうだったに違いない。²²

三日間湿布を巻いた後、カーリーファーはまた手を固定し、十七日たってははずした時には、すっかり治っていた。アートマラームは井戸から水を汲み上げ、腕相撲までできるようにになった。添え木をはずす前、カーリーファーは神様にお祈りし、治った手を見て許しを乞うような様子で言った。

「先生、あの日は興奮して啖呵を切ったけど、モスクで泣いて何度も夜にお参りしたんです。『神様、俺は偉そうなこと言いました。お許し下さい』、て。今日は怖かった。俺がうぬぼれた罰がこの子に当たったらどうしよう、と思って。でも、神様は俺のお祈りをお聞き下さった。ネジがはまるみたいに、骨がくっついてくれた」

金儲け主義の医者とカーリーファーは比べものにならない、と私は心の中で思った。それから、あの日のきつい言葉を謝った。彼は立って話していたが、ひとりで私に抱きついて言った。

「とんでもない。とんでもない。先生、何を言うんです」

私はあの偉大な名医に、人夫のカーリーファーが骨を治したことを知らせた。彼は信じられないと驚いて、学生をメーラットによこすように頼んできた。私はアートマラームをメーラットに行かせた。一時間も骨を診察した後、名医は言ったということだ。

「手は本当に治っているけど、どうやったのか信じられないなあ」

²² マハーバーラタの逸話。Jayadratha(Duryodhanaの義兄弟)がAbhimanyu(Arjunaの息子)を殺したので、翌日の日の出前、ArjunaはJayadrathaを殺す誓いをたて、Kṛṣṇaの助けを得て果たす。

医者のその時の顔は一見の価値があった、と私は後で聞かされた。困ったように、手を何度も何度も見ていたそうだ。

もうひとつだけ例を挙げよう。

イギリス支配当時、あるイギリス人の警視の息子が、イギリスからやって来た。しかし船に乗る時、転んで手を折ってしまった。船の中でもインドでも、多くの医者が治療を試みたが、手は治らなかった。ある金持ちの友人が、警視にミールー・カーリーファーを紹介した。カーリーファー（太守）という名前が効いて、彼を呼ぶことになった。やぼったい汚れたターバンを頭に乘せ、長い垢だらけのシャツ、肩には赤い手ぬぐい、腰布の下には破れた靴。カーリーファーのこの姿を見てイギリス人は怒り、金持ちの友人に言った。

「すまないが、私の大事な息子の手を、こんな藪医者の実験台になんてできないよ」イギリス人の様子から、英語の一字も知らないミールー・カーリーファーだったが、生まれ付きの勘の良さで嫌がっていることを察した。田舎弁まる出しで、彼は言った。

「旦那、ちょっと俺にぼんの手を見せてみな。何でぜんぜん痛みが消えんのか、見てやるから」

「イエイエ。アナタ私ノ息子ノ手ヲ、コワシテシマイマス。アナタ、ドクタージャアリマセン」

イギリス人は英語訛りのヒンディー語でこう言ったが、カーリーファーもすぐに引っ込むような男ではなかった。彼は田舎訛りのヒンディー語で啖呵を切った。

「でも、あんたは警察のえらいさんだ。あんたの息子の手がだめになったら、御上に訴えて俺を絞首刑にしたらいい」

その金持ちの友人もイギリス人に勧めたので、カーリーファーの治療が始まった。十七日目に息子はテニスを始めた。カーリーファーの手は、魔法の杖だった。患者は包帯を巻いてもらった途端、眠り込んでしまった。

「骨が元のところに収まったら、痛いわけがない」と、彼はよく言っていた。

カーリーファーの暮らしは、決して裕福ではなかった。穀物を量り、果樹園の収穫物を買ったり売ったりして、自分の家族を養っていた。とても思いやりがあり、いつも陽気だった。どんな仕事をしていても、呼ばれるとすぐに怪我人を見に行った。そのために、一日の稼ぎをふいにすることもしばしばあったが、その癖をどうすることもできなかった。自分の食事を放り出して、泣いている子供の添え木を当てている彼を、私は何度も見た。彼のちっぽけな家は、田舎町と近隣の村にとってはダヌワンタリ²³の館も同然だった。人々は、彼の家に泣き泣きやって来て、笑顔で帰って行くのだった。

彼には欲のかけらもなかった。西洋医者^{ドククター}のように傲慢なこともなく、伝統医学^{ヴェイ・ド}の医師のように偉ぶることもなく、アラビア医^{ハキム}のように気難しくもなかった。彼は治療費も取らず、薬もなく、薬剤師もいなかった。すすんで患者の方からくれる物は受け取る。く

²³ Dhanvantari. 大海を攪拌した際、不老不死の霊水を持って生まれたとされる神医。インド医学の開祖で、神々の医師と伝えられる。
アーユルヴェーダ

れる余裕がなかったり、余裕があってくれなくても、文句は言わない。幾度となく彼が治療代を自分の権利ではなく支払う人の好意と考えているように感じた。もっとも、何かくれようがくれまいが、カーリーファーは自分の仕事をするだけだった。彼にとっては、これは神への祈りのようなものだった。

彼は自らの成功を神の御加護と考え、怪我した人の役に立てることに喜び、満足していた。ヒンドゥー教徒とイスラム教徒を区別することはなかった。ひとりの人間として、怪我した人の世話をしていた。世話をするどころか、本当のところこれが彼の習慣になっていた。こうしていないと彼は落ち着かないのだった。

ある日、私は彼に言った。

「あなたのために、自宅とは別に病院を建てようと思うんです。馬車に乗って往診に行ってください。収入も増えるし、見た目にもかっこういいですよ」

「でも肝心の問題は片付きませんよ。それには、問題があるのです。そうなったら、今みたいに怪我は治らなくなります」

「どうしてですか」私は驚いて尋ねた。

「つまり先生、俺は骨を表面だけ固定して、神様が中から治して下さるけど、俺が欲を出したら、神様は俺を手伝って下さるかなあ」

というのは、こういうことがあったからだ。カーリーファーは、ぐちゃぐちゃになった足を治した。医者は、足を切断する費用として200ルピーを請求した。足を切る以外に方法はない、というのが医者の言い分だった。カーリーファーは十時間かけて足を固定し、一月後にはずした時には足は完全に真っ直ぐになっていた。細かく折れた骨をきちんとつけることは医者にとっては奇跡だったが、カーリーファーはこの全ての努力の報酬として6ルピーを受け取っただけだった。

裁医者に足を切断してもらうためなら、200ルピーを支払うことをいとわないのに、カーリーファーに足を付けてもらって6ルピーしか出さなかったことに、私はとても腹が立った。出かけて行ってその男を叱りつけ、カーリーファーに相応の金を払わせようと思ったが、カーリーファーが止めた。彼がその日言ったことは、人類愛の珠玉集にも載せるに値する言葉だった。

「いやいや、先生。俺が受け取るのは、無理やり取り立てる税金じゃない。志を受け取るんだ。これは商売じゃないんだよ。子供を養わなきゃならんから、くれる物を断ることはしないけど。そうじゃなかったら、怪我した人から金をもらったら、罰が当たるよ」

この言葉を思い出すと、彼は聖者にも劣らないと私は思う。威張ることは全くなかった。私は彼の自慢話を一度も聞いたことがない。自分の技術で名声を得られると、全く考えていなかった。生涯数千人もの人々に安らぎを与え、何百人もの人生を救ったが、自分の方からこの偉業については決して話さなかった。彼は、本当の意味で真っ直ぐに神を信じるイスラム教徒で、奉仕はこの人の性分であり、趣味であり、本分だった。

「あなたの技術を誰かに教えてやってくれませんか。そうしておかないと、あなたが

がいなくなったら、受け継がれません」

ある日、私は言った。

「ええ。誰かに教えてもいいんだけど。イスラム教徒の子は信心が足りない。今日来たと思ったら、明日にも一人前になりたがる。ヒンドゥー教徒の子は、^{けが}穢れの考えに毒されてるし」

五、六年前、ひとりのヒンドゥー教徒の少年がやって来た。数日でこつを掴み始めた。ある日、私といっしょに村に骨接ぎに行った。そこはムスリムばかり住んでいる所だったので、その少年は水さえ飲まなかった。夕方帰ると、出ていったきり戻っては来なかった。

「先生。この技は俺といっしょに墓で眠るしかありませんな」

予言は当たった。もう、彼はいない。彼の技術も受け継がれなかった。共にデーオバンドの墓に眠っている。六十才でカーリーファーは最後の眠りに就いたが、生涯蒔き続けた奉仕と愛の種は不滅だ。それともなくなるなら、人の世を美しくする庭園も、いばらの生い茂る森になってしまうだろう。

原題 'Mirū Khalifā'

ドクター・ヨーチン

サハーランブル刑務所。

一九三〇年の期待と喜びにあふれた日々。²⁴

そして禁固一年の初めての入獄。

『刑務所の医者は私の親戚です。話しはしておきました。できることなら、あなたを助けてくれるでしょう。何かあったら、遠慮なく相談して下さい。』

友人のひとりがこの手紙をくれた晩、ある模範囚が私を作業場から連れ出した。

ドクターは部屋の外の自分の椅子に座っていた。そばの小さな机の上には薬瓶が十二、三本置かれていた。薬剤師をつとめる囚人もそこにいた。彼を以前にも見たことはあったが、今日初めて、真近で、しかもじっくり見た。地面を震わせそうな長身、目まで埋まるような頬、揺れる大きな腹、道も砕きかねない足、人間の骨の上に張られた象のような皮。

私を見ると、すぐに彼は私を自分の部屋に連れて行き、低い声で話した。

「いいかね。何も心配することはないから。ここの所長はひどい奴だけど、君に手出しはさせない。もし君を労働に就かせたら、わしがすぐに病人にしてやるからな。そうになったら、病院で寝てミルクを飲んでいればいい」

²⁴1930年は、注9で述べたサティヤグラハ運動が展開されていた。

こう言うと彼は部屋から出たので、私も外に出なければならなかった。しかし私は出ながら、狼のボスが子鹿や小動物に養子にならないかと誘っているような気がした。

外に出た途端、ドクターは言った。

「刑務所に入って不死になったと思いたまえ。君はサンスクリットを知っているだろう。わしが君に伝統医学を教えてやろう。そうすりゃ左うちわだ、せがれよ」

「でも、あなたは西洋医でしょう。^{ドクター}先生！」

私が尋ねると、彼は言った。

「ああ。わしは、確かにそう、西洋医学のドクターだ。だがね、せがれ、わしは刑務所ではドクターで、田舎では^{ウエイ}インド^ド医^ヤでやってるんだ。妻の実家では、みんなわしのことを^ハアラ^キビ^ア医^ムと呼ぶんだ。わしは^{グル}師^{グル}からあらゆる知識を学んだ。せがれ、ひとつの分野に通じた者にとって、全ての学問は同じだ。インド医学でカルプーラと呼ぶものは、西洋医学ではカンフル、アラビア医学ではカーフルと言う。だがね、葉は全く同じなんだよ」

少しとぼけて、彼を持ち上げて私は言った。

「あなたのような^{グル}師^{グル}に刑務所で会えるなんて、幸運です。でも、本は揃いますか。私は本を持っていないので、御自分の本を貸して下さいのですか」

私が師と仰いだことで、彼は喜んだ。

「せがれ、本など必要ないよ。わしが大医者に仕立ててやるから。それにわしだって、本など読んだこともないんだ！」

*

話を済ませ、私は自分の持ち場に戻ったが、頭の中でドクターがぐるぐる回っていた。看守が私を粉挽きの労働に就かせたら、医者は私をすぐに病人にする。すると、私は病院でミルクを飲む。一体これはどういう意味なのだろう。だいたい、コーランも読まずにどうやってイスラム学者に仕立てるつもりだろう。

疑問が次々と浮かんできたが、答えは出なかった。その日は体重測定の日で、囚人は全員測定に行き、体重が記録簿に書き込まれた。これが刑務所の健康診断だった！ 我々が測定を受けていると、ひとりの窃盗犯がひそひそ声で言った。

「ドクター。何ヶ月も粉挽きをしたんだから、そろそろ病院に入れてくれんかね」

薬剤師の囚人が言った。

「袖の下のひとつもなしに、病院に入りたいてか？」

「あるぞ、2ルピー」囚人は言った。

「じゃあ、ドクターの靴を暖めるんだな」

薬剤師がやり方を教えてやると、囚人は2ルピーをドクターの靴に突っ込んだ。ちょっと周りを見渡ししながら。しかし、ドクターは満足しなかった。このくらいのお布施^{ウヤク}で利益

を与えるつもりはなかった。薬剤師がせきたて、囚人がさらに２ルピーを届けると、ドクターは喜んだ。

「よしよし。心配するな」

そして６５キロの体重を記録簿に６０キロと書き込み、三、四日毎日病院に来るようという指示を小声で与えた。

次の日から、その囚人は病院に通い始めた。ドクターは彼に赤痢という病名を与えた。こうして四日目に、病院に入院した。刑務所の病院は、本物の病人にとっては恐ろしい地獄も同然だったが、仮病の者にとってはどこかの王国のゲストハウスのようなものだった。その時、なるほどこれが、ドクターが病人に仕立てる技芸の作法なのだということが分かった。

＊

ドクターの治療法も全く変わったものだった。全ての薬を十二本の瓶に入れていた。それぞれの瓶には、カレンダーから切り取った１、２、３、４等の番号が張ってあった。というのは、薬剤師が薬の名前を理解するのは不可能で、ドクター自身も処方箋を書くために費やす時間を、ナショナルロスつまり国家的な損失と考えていたからだった。

たいてい、彼は病人に触れなくても遠くから見ただけで充分だと考えていた。体温計は数週間、また聴診器は数か月間、家に置きっぱなしになっていた。それらをポケットに突っ込んだ日には、二、三人の病人、特に会議派党員の患者の脇の下にちゃんと体温計を差し込み、胸に聴診器をあてた。

ある日、私は微熱があった。体温計を当てて、ドクターは飛び上がって言った。

「あれ、四十度も熱があるよ！」

私は吹き出した。つまり、いったん人の体温を計ったものを、日盛りも下げずに私の脇の下に当てたのだった。聴診器を使う時、耳に入っていようが首にぶら下がってようが、何も注意を払わず、ただ胸に当てただけですっかり分かるのだった。

彼は、診察の済んだ病人を薬の台のそばに一列に並べ、全て診察が終わると囚人から一本ビリー²⁵をまきあげ一服やり、薬剤師に言う。

「一番に７番、二番に９番」

意味は、一番の患者に７番の薬を、二番の患者に９番の薬をやれ、という具合だ。こうして全員の診察を済ませ、病院に行く。

しばしば、こんなこともあった。

「五番に１０番」と言うと、薬剤師が「ドクター、１０番はなくなりました」と言った。するとドクターは瓶に目を遣った。

「ほら、そこに置いてある黄色いやつだよ」

²⁵ インドの廉価な葉巻きタバコ。刻みタバコをリュウキュウコクタンなどの木の葉を丸めて包み、赤い糸で巻いたもの。

しかし薬剤師は意味が分からず答えた。

「これは12番です、ドクター」

これを聞くと、彼はもう一度瓶を見詰めて言った。

「そうなんだ。12番をやれ。それも効くのだ」

薬剤師は、自然に上を向く囚人の開けた口の中に、アルミの匙でひと匙、薬を放りこんだ。それは、南インドの人たちが壺から水を飲むのと似ていた。

どの患者がドクターの病院に何日入院するかの鍵は、ドクターの手に握られているわけでもなければ、患者の病状次第というわけでもなかった。これは、病気の囚人が何回彼に「靴の下」を届けるかにかかっていた。

月曜日に市の医務官が視察に来ると、ドクターは健康な病人を前もって本物の病人のようにそこに寝かせておいた。しかし医者が帰ると、彼らは飛び起きて、本物の病人には耐えられないほどの大騒ぎをした。

何人かの病人に、ドクターはいつもミルクを与えていた。病人全員のミルクが合わせて3セールなら、この3セールのうち出入りの牛乳業者が1セール分のミルクをドクターの家に届け、その代わりに1セールの水をそこに混ぜ、きっちり3セールにして病人用に病院に届けるのだった。牛乳業者とドクターに加えて、病院の主任の薬剤師、看守、厨房の責任者もこのミルクに関税をかけた。このように、牛乳屋の家から病人の口が届くか届かないうちに、この牛乳はガンジス川、ヤムナー川、サラスヴァティー川の合流点のようになっていた。

一度、私が会議派囚人の意見としてこのことに触れると、ドクターは言った。

「君は学があるのに馬鹿になったね、せがれ。おい、牛乳は人間の飲むだけのものじゃないぞ。これをもらったら、病人はいいものをもらっていると少し気が楽になるだろう。これにちょっと水が混じったの混じらないのって、たいした問題じゃないだろう」

一呼吸おいて高等裁判所の判例を出して言った。

「マハートマー・ガンディーなんて牛乳をやめて山羊のミルクを飲み始めたし、ドローナーチャーリヤ²⁶は息子に麦粉を溶かして飲ませたのだ。だから、単なる気休めなんだよ」
私は、ドクターがたいへん論理的だということを認めざるをえなかった。

ドクターは、容姿が醜くかったのとは対照的に、優しい声をしていた。彼が年とった囚人まで『せがれ』と呼ぶので、アンダマン島の島流しから戻った年老いたラフマーン・カーンはある時うまいことを言った。

「もし父親が生き返ったら、父親に向かって『よう、せがれ。元気だったかい』って言うだろうな」

*

²⁶ Drona. マハーバーラタに登場する有名な聖仙。Pāṇḍava に武術を教えた。

ドクターは大変な眠たがりで、自分でも、「朝六時から夕方の六時までずっと仕事をしたからって、どうっていうことはないけど、夜起こされたらむかむかしてしょうがない」と言っていた。

とは言っても、起こすのも並大抵なことではなかった。彼はとても深く眠っているの、耳元でガンガン鳴る鐘の音でもビクともしなかった。眠っている間ものすごい鼾をかくので、初めて来た客は家で臼を挽いているのではないかと思うほどだった。それでも起こそうと決心して奮闘すると、一時間かかって目を覚まし、まずこう聞くのだった。

「何だ。どうした。誰か脱走したのか」

病人の症状が悪化したと伝えたと、ドクターは言った。

「馬鹿たれが。病人が死にかけたからって、わしは、死神の車をすぐに停止させるような信号じゃないぞ。病気が悪化したら、お前がアーアーアーとちょっとスピードを上げて嘆きの声を出してやれ。だいたい、わしが起きたからって、することは何もないじゃないか」

模範囚はどんなにひどい病気でも、彼を起こす気にはなれなかった。なぜなら、彼は前もって全員に言っておくのだから。

「私を夜起こしたら、昼間こき使ってやるからな」

このイギリス式の御触れを、次のように誇らしげに説明した。

「わしはドクターだから、わしが病気と書けば病気で、健康と書けば健康なんだ。いいかぼうや、今度はひもを編むのだ。チガヤを打つのだ。臼を回すのだ。病院で、長い間極楽三昧したからな。わしの筆先には、これだけの力があるんだぞ」

この筆の力にもかかわらず、会議派囚人のために起きなければならないことがあると、次の日彼はずっとあくびをしてぶつぶつ言っていた。年老いたラフマーンはドクターに言った。

「よそに転動させてもらったらどうだ。ここじゃあ、これからこんなものですぜ」

これを聞くと、ドクターは頭に手をやって深く息を吸い込んで言った。

「ラフマーン、転動させてもらうとこなんぞ、ありゃせぬわい。この白アリみたいな奴らは、国中にいるんだぞ」

*

父親とバラモンに付けてもらった名前を約五十年間使用した後、ある日、彼は新しい名前をもらった。ドクター・ヨーチン。

これもおかしい話なので、お話ししよう。

タークル・アルジュナ・シンのひ臓が刑務所内で腫れて、彼が少し衰弱したので、仲間たちが心配した。彼自身はとても口数が少なく、死ぬようなことがあっても、自分のことについては何も言わないような男だった。ある日、無理やり彼がドクターのところに運び込まれた。診察したドクターは言った。

「別に大したことはない。二、三日で良くなるだろう」

そして親切にも、自分で立ってヨーチンをつけた綿棒をタークルの腹に塗った。

私は後で言った。

「ドクターも不思議なことをしますね。ひ臓は腹の中なのに、ヨーチンを腹の上に塗るんですか」

「君は会議派党員のいる刑務所に入って、頭がおかしくなったんじゃないか。君ねえ、ヨーチンはねえ、ひ臓^{ディッリー}どころか猫^{ヒッリー}も溶かすんだよ。君の腹の中で跳びはねてる猫^{ヒッリー}をね」

ひ臓^{ディッリー}と猫^{ヒッリー}の語呂合わせで我々はその日笑い転げた。しかし数日後、本当に大変なことが起こった。一晩中ダルムビール・ヴェダーランカールの奥歯がおそろしく痛み、本人も眠れなかったし、我々も眠れなかった。朝、ドクターが彼を診察して大きなガーゼをヨーチンに浸して、歯茎に当てた。ヨーチンを口の中に！またたく間に彼の舌と歯茎と顎が焼けただれ、見るからに恐しくて息が止まりそうになった。

医務官のホームズ先生に訴えると、先生は信じられない様子だった。しかし、病人を診察すると、怒りに我を忘れて叫んだ。

「君は馬鹿か、豚か。ドクター、君はこのガーゼを奥歯に当てたのか」

ホームズ先生が尋ねると、ドクターは言った。

「こいつは痛みが止まらなかったら死ぬ、と言っていたんです。こいつに痛みが消えたかどうか、聞いて下さい」

ドクターは、まだ自信満々だった。これを聞いて、ホームズ先生が笑ったばかりか、ダルムヴィールの焼けただれた口にも微笑みが広がった。ホームズ先生は車をやって自分の病院から薬を持ってこさせ、ミルクを出すように指示し、少し謝った。帰る時、ドクターをもう一度叱った。

「君に医者資格はない。牛のかわりに、畑に水でもやっておれ」

イギリス人の役人のお叱りを我慢して聞いていたが、外に出た途端、すまし顔で言った。

「ヨーチンにどんな効果があるか、知りもせぬくせに。できるものなら、ここの会議派党员全員に一杯づつ飲ませて見せてやるんだが」

そして、いつどこから新しい名前がついたのか、まるで彼は生れながらにしてドクター・ヨーチン・ブラサードという名であるかのように広まった。

ドクター・ヨーチンは全く動物のような人だったが、確かに人間的な動物だった。つまり、彼の人間性に獣が潜んでいたが、動物的な面にもどこか人間性が潜んでいた。

ある時、自分の得にもならないのに、ある村の未亡人の一人息子を心から可哀相に思って助けた。息子は、伯父たちの企みで危うく絞首刑になるとこだった。ドクターがその気になれば、この件で充分にお礼をもらうことができたのだったが、それはしなかった。私が言うと、「金は天下の回りものさ、せがれ」と答えた。

同じように、また別の時、ドクターは言った。

「囚人から100ルピー稼いで、そのうち2、3ルピーを使ったからって、どうって
いうことはない」

時々自分の病院で沸かしたお茶を独房に届けてくれた。そういう時には彼がカルナ²⁷や
ダディーチ²⁸そのものに見えたものだった。

実は人間は、根本的には常に善人なのだが、環境が人間を変えるのだ。ドクター・ヨー
チン・ブラサードも、環境が作り出した不思議な人物だった。

原題 ‘Dāktar Tīncar Prasād’

国の宝

「サードゥーシン、被告は第四十四条²⁹を破ったことを認めるか？」

「わしがなして破るんだ？」

法廷が静まり返った。

一九三〇年、サティヤーグラハが繰り広げられていた。国中に、祖国に身を捧げる精神
がみなぎっていた。義勇隊員はすすんで逮捕された。警察は彼らを法廷に突き出し、そ
の罪状を読み上げた。いつも判事が問うと、被告は「相違ありません」と答え、判決が
下され、およそ十五分間で裁判は終了する。裁判のために警察は何も準備しないし、法
廷調査官は全く証拠調べをせず、検察側は証人ひとりたてないほどである。確かに、被
告自ら罪を認めるなら、証拠集めなど必要あるものか。

その日、サードゥーシンが公訴事実を否認すると、しきたりとなったこの流れが止まっ
たかのようになった。まるで道を歩いている人の足にとげが刺さったかのである。
判事が証拠不足と言ってサードゥーシンを釈放すればイギリス人の地方長官^{コレクター}からひどく
お叱りを受け昇進の見込みはなくなり、法廷を延期するとすれば、その理由を何と説明
すればいいのだろう。

チャンドラダル・ジャールという老獪な判事はサードゥーシンをじっと見た。正直そ
うな無学な農民。この男がうそを言うはずはないのにどうということだろう、と考えた。

「ミスター・サードゥーシン、君はデーオバンドには第四十四条が出ているのを知っ
ていたか？」

田舎弁でサードゥーシンは答えた。

「出てるだろうよ。でもわしは、大通りをシロガンを叫んで回ったけど、そいつは全
然見なかった」

²⁷ Karna. マハーバーラタの登場人物。Pāṇḍava の敵ながら実は兄弟で、気前がよく、物惜しみしないこと
で有名。

²⁸ Dadhici. リグヴェーダに初出する聖仙。助けを求めた Indra 神に、自分の肋骨で武器を作り与えた。

²⁹ インド刑法第一四四条のこと。非合法の集会で武器の所有を禁止する条項。

ジャール氏は笑った。なかなか手強い。

「サードゥーシン、君は月曜日に村からデーオバンドにやって来たんだな。それから君は何をしたんだ」

「判事さん、わしを困らせんでおくんなさい。わしは何かしたかもしれんが、あんたのシジュウシジョウは破いとらん。わしは村から来て本部に行って、そこで夜、先生が言っとった。人をののしったり、物を壊したり、暴力に訴えてはならんというのがマハートマーの命令じゃから、わしがシジュウシジョウを破ったりするもんか。間違いありません。判事さん、悪く思わんでくんさい。でも、警察の言うことは全部でたらめなんですわ」

判事は思わず笑ったが、見当がついてきた。笑いをこらえて尋ねた。

「分かった、分かった。それで火曜日に何をした、サードゥーシン？」

「いや、何もしとらん。ただ桑の枝に会議派の旗をくくりつけて、大通りを『マハートマー・ガンディー万歳』って叫んで回ったけど、本当にわしはみんな回ったけど、ガンジス川にかけて、わしはシジュウシジョウには会っとらん。うそじゃない。そいつが破れたとしても、わしじゃ知らん。勘弁して下さい」

判事にはもうこれで十分だった。彼は判決を下した。情状酌量を望むので、被告は放免する。サードゥーシンは驚き、その日のうちにまた本部に来て言った。

「先生、あの判事はわしをひどく困らせたけど、あんたはわしに前もって全部教えてくれたから、わしは言ったのさ。破ったとか破らんとか、わしはそいつを見たこともないわ」

私はサードゥーシンに、釈放された本当の理由を説明してやった。私は、彼が恥ずかしがるだろうと思ったが、彼は気合いの入った口調で言った。

「わしに明日、もうひとつ旗を下さい。わしは今度はそいつの正体を見てやる」

そして次の日、彼はまた第四十四条を破り捕えられた。公判で彼はまた訊かれた。

「被告は第四十四条を破ったか」

すると彼は大声で言った。

・「破ったなんてもんじゃねえ。シロガンを叫んで、そいつの骨を一本残らずへし折ってやったのさ。かわいそうに、一月やそこらは寝込んで、治療を受け、療養することになるさ」

判事は少し笑い、少し照れ、そして二ヶ月の重刑を下して席を立った。

私はその日考えた。そして今でも考えているが、サードゥーシンは祖国の隷属の意味も分からず、独立に対する期待もなく、革命もガンディー主義も分かっていたのに、彼を突き動かしていたものは、一体何だったのだろう。

私の疑問は、今なお疑問のまま残っている。こちらへ歩いて来るのが見える。私の思い出の花園を歩いているひとりの男性。履いているのは何の変てつもない靴、磨いたのは靴を作った職人だけだろう。ほとんど洗濯に出されたこともないありきたりのシャツとズボン。頭はつりと禿げあがり、髪は後ろの下半分だけ残り、刈り残したヒンドゥーの「髻」^{チュティヤー}が束ねられずに後ろに垂れていた。

この人は誰だ？ 一九三〇年の運動でサハーランブル刑務所の10号棟で、彼を見かけた時、ひとりの友人に尋ねた。答えは「チュティヤー・パルサード」。

右の耳にペン、脇に記録簿。私は言った。

「ちゃんと教えてくれよ」

「俺を信用しないなら、誰か他の奴に聞いてみる」

そう友人に言われて、本当に私は訊いてみた。すると、別の男も同じことを言った。数日後、その「髻」^{チュティヤー}から呼び名がついたということが分かった。本名はシュリー・シヴァナーラーヤナで、所長代理だった。とてもまっすぐな人だと私は思った。また同時に、人の素直さまでもすかさず笑いものにすると、我々の精神のたるみも相当なものだと思った。

しだいに彼のことが分かってきた。一九二〇年、彼はアーグラ刑務所の責任者だった。故クリシュナカント・マーラヴィーヤ³⁰、マウラーナー・ハスラット・モーハニー³¹等会議派の指導者は、その刑務所に収容されていた。刑務所では賑やかに詩の会が開かれ、シヴァナーラーヤナ氏の監督の下、誰もが和やかに過ごしていた。面会日には彼は刑務所の大門を開け、群衆が皆、中に入り込み、まるでその日はそこでグーガーピールの祭り³²でもあるかのようなようだった。時間の制限も全くなく、夕方まで全員座り込み、夕方帰る時はまるで行列のようだった。ある日、この行列といっしょにクリシュナカント・マーラヴィーヤ氏も刑務所から外に出て、友人と話しながら大通りの方へ行った。そこに着くと、自分が囚人であることを思い出し、急いで帰った。

この事件の噂は飛んで行って上司まで届き、シヴァナーラーヤナ氏は所長から所長代理に降格されてしまった。彼はこの報告をまるで自分の人生には全く関係ないかのように受け止め、またいつか所長になるために努力もしなければ、望みもしなかった。

一九三〇年と三二年の運動の際には、代理であったが会議派党員の囚人が安心して暮らせるように会議派全国委員会によって任命された連絡官のような存在であった。夕方六時に刑務所は閉まり、六時半にはその日の刑務所のニュースが全て会議派事務所に伝えられ、七時にはそれはチョークで黒板に書き込まれた。誰か会議派の党員が別の刑務所に移される時は、駅で家族の者や友人が出迎え、花輪をかけ、御馳走し、スローガンを

³⁰(Kṛṣṇa Kānt, 1883-1941) イラハバード出身。マダニ・モーハン・マーラヴィーヤの甥。スワラジ党員。サティヤーグラハ運動に参加し、三度投獄されている。

³¹(Hasarat Mohanī, 1878-1951) 国民会議派過激派。ウルドゥー語の詩人としても有名。

³²Gūgā Pīr 北西部インドを中心に信奉されている伝説上の聖者。蛇に対して力を発揮するものとされている。Gūgā Pīrを拜むと蛇の危険から身を守ってもらうことになると考えられており、バードン月の黒半月の9日 Gūgā Naumīという祭りが祝われる。(古賀勝郎「北中部インドの祭り」)

叫び、群衆が集まった。CID³³は両事件について上司に報告した。上司が問いたです。

「刑務所の情報がどうして外にもれるのだ？」

調査がなされ尋問されたが、一度も真相はつかめなかった。これは全て、所長代理の凄腕のなせる技だった。これだけではない。一時の情熱に流されてやって来た者の中には、刑務所暮らしが耐えられない者もいたのだが、この人のおかげで刑務所は耐えられる場所になったのだった。

ある日、私は言った。

「こんなに長くつらい仕事をして、まだ代理止まりなのは私たちのせいです。私たちは花輪をかけて刑務所に来て、花輪をかけて刑務所から出ます。でも、あなたの犠牲を誰が評価できますか？」

彼はシャツをまくり上げ、裸の胸にぶら下がっているめぼうきの首飾り^{トール シー マーラー}³⁴を見せて言った。

「あなたたちは、刑務所に来る時と出る時花輪をかけますが、わしは刑務所でもいつでもマーラーをかけています」

そして、びっくりするような大声で笑った。なんとも言えぬ無欲で澄みきった笑い方であった。

それから真顔になって言った。

「看守という言葉はまるで地獄の獄卒^{クローガー}で、その恐ろしい姿がわしの前に立ちほだかっているように感じるが、わしと獄卒^{クローガー}の間には代理という言葉が挟まってくれたので、恐ろしい獄卒^{クローガー}は陰に隠れて見えないみたいだ」

これを聞いて、私は身の震えるのを感じた。すると彼は言った。

「何度仕事を辞めようと思ったことか。でもその都度心が言うんだ。お前は確かにイギリスに雇われた労働者だが、召使や使用人では全くないではないか。召使だとすれば、それは自分の精神だけのものじゃないのかってね」

しばらく考えて彼は言った。

「マハートマー・ガンディーはサティヤグラハの勝利にとっては、神に祈るだけの人も非暴力の兵士だと、書かれたことがありました。それからは、差はあろうが、わしもマハートマーの兵士だと思って慰められたのです」

私たちは別々のバラックで暮らしており、他のバラックへ行くことは禁じられていた。絶対にむこうへ行くことはできなかったが、離れ離れになっているという気はしなかった。

私たちは絶え間なく情報を得、常に意見を交わしていた。数珠に糸を通すように、代理が我々をつないでくれていたからだ。

昇進に対する欲望や退職後たっぷり年金をもらうという誘惑はどれほど強いものだろう。それから逃れるのは、困難どころか不可能だったが、代理はこの不可能をいとも簡

³³Criminal Investigation Department.

³⁴Tulsiはヒンドゥー教、とくにヴィシュヌ派の人々が聖草とし崇拝の対象とする多年草で、罪や穢れを净める力があるとされている。(『南アジアを知る事典』平凡社)

単に可能に変えた。おそらく自分では何かしているとは決して思っていなかったのだろう。信念はとても気高く、その行動は美しかった。とても無口な人ではあったが、彼の思い出は実に生き生きしている。

ガンディーの政治的成功は祖国の前に示されたが、これがマハトマーの最大の成功だったのだろうか。サードゥーシンという義勇隊員とシヴァナーラヤナという代理を思い出すと、私は思うのだ。民草の心に植え付けることのできた無償の熱誠が、ガンディーの最大の成功だった。欲を捨て、普通の人々が祖国のために身を捧げる時を望み、機が熟すと我が身を顧みずに突進したその熱誠。

我が故国に喜びあれ、自由あれ

我が命は如何になろうとも

*

一九三〇年。ファデーガル³⁵刑務所の模範囚スダルシャン。模範囚とは、刑務所の囚人を統率する囚人である。刑期の長い囚人が、刑期の半分以上を過ぎると模範囚に任命される。彼らは黄色い制服を着、記章をつけ、4ルピーの月給をもらう。重罪の囚人だけが、良い行いの褒美として毎月四日間刑期が短縮されるが、模範囚は六日、また役人が満足すれば毎月七日まで短縮される。この軽減は囚人にとっては喉から手が出るほど欲しいものだ。なぜなら、これには二十年の禁固刑の囚人を十四年で、つまり六年早く釈放させる力があるからだ。

スダルシャンは殺人罪で十四年の実刑判決を受け、すでに十年を過ごし、三年半の軽減を受け、間もなく釈放される予定だった。釈放される囚人の胸は、夢でいっばいで、四六時中空想にふけり、夢想家になり、夜も昼も新しい人生を思い描く。スダルシャンは、家に帰ればまず最初にれんが造りの家売ることになっていた。彼の家に住んでいる借家人と刑務所にいるうちに話しをつけ、1万6千ルピーで取り引きが成立していた。4千ルピー以上の銀行預金があり、その他分散しているいくつかの金もあわせると、約二万五千ルピーが彼の手に入るようになっていた。それから、少し出費し、貧しい娘を嫁に取り、いっしょにボンベイに行って何か商売を始める予定だった。この全ての夢は、次の一言に込められていた。

「世間じゃ毎年ディーワリーの祭り³⁶があるけど、先生、俺の人生では今年が初めてのディーワリーだ」

ダシャハラーの祭り³⁷の前に釈放されるという確かな見込みがあり、手紙のやりとりで全て手配を済ませた。過去はもう終わりを告げた。現在には何もなかった。ただ未来

³⁵ アーグラの東、約160キロに位置するウッタル・プラデーシュ州の小都市。

³⁶ ヒンドゥー教の祭で、毎年カルティク月（インド暦第八月）黒半月最後の日に行われる。家の中や外に燈火を点し、富の女神 *Lakṣmī* を拝む。

³⁷ ヒンドゥー教の祭。アシュヴィン月（9 - 10月）の満月に向けて十日間行われる。秋の始まりを祝う祭。ヒンドゥー神話では、ラーマ王子が *Rāvaṇa* を倒したためだといわれる。

の夢のみが彼の本当の人生だった。それは甘い新婚生活の夢であり、喜びに満ちた夢であり、華やかな未来の夢であった。

ファテール刑務所は、上の^{クラス}級の会議派囚人たちで賑やかだった。昼間は学習会があり、演説があり、夜はお祈りがあり、バジャン³⁸が響き、話しの中でガンディーやネルーの思い出話が語られ、皆夢中になって歓声をあげていた。スダルシャンは心では監獄の外にあり、清く正しい市民生活を送っていた。会議派の同志パルメッシュワリーラール・グプタが語ったことだ。グプタ氏の言葉によれば、実はスダルシャンも今では会議派党员になってしまっていた。彼はグプタ氏に言った。

「だんな、マハートマー・ガンディーに必ず会わせてくれ。機会があれば一度は俺も会議派党员として刑務所に来るからな」

模範囚だったので、彼は所内のあらゆる場所に行くことができ、刑務所の外とも行き来する仕事もあった。その御利益に与かったのは、会議派党员の囚人だった。自分の秘密の手紙をスダルシャンに託し、彼は外のポストに投函した。刑務所にはラブレターを書く者はもちろんいたが、作家や記者もたくさんいた。彼らは刑務所のニュースを友人の編集者に送り、それらは掲載された。それには、政府が驚き刑務所の情報が流れたルート³⁹の解明に乗り出すというような情報までもが含まれていた。

ある日スダルシャンが刑務所から出ようとしていた時、身体検査が行われ、ポケットから秘密の手紙が十通出てきた。中身は相当なものだったが、どれも署名はされていない。イギリス人の所長は怒り狂った。上から厳しい叱責を受けていたのだ。彼はその手紙を書いた者を裁判にかけたいと思った。スダルシャンはその者たちの名を尋ねられると、答えて言った。

「知るもんですか」

所長は脅した。

「名前を言えば、お前の罪を許してやろう。わしの特権でお前の刑期の残りを全て免除してやろう。明日にも釈放されるぞ」

とてもつらい選択だった。ヴィシュワミトラ仙の前に天女メーナカーが立ったようなものだった。³⁹スダルシャンは身震いひとつせず、全く変わらなかった。平然と彼は言った。

「十年暮らした刑務所に、あと数ヶ月いるからって、友人を裏切るわけには参りません」
所長は烈火のごとく怒り、どなった。

「誰が数ヶ月だと言った。刑務所の規則に従い、お前を裁判にかけ、刑期の短縮を取り消してやる」

スダルシャンはこれを聞くと真っ青になった。すると、雷鳴にも似た声で所長は言った。

³⁸ 神に対する熱烈な献身を歌うインド音楽曲の一形式。

³⁹ Indra 神の命により、ある時 Menakā は森で苦行をしている Viśvāmitra 仙に近づき誘惑し、苦行の邪魔をした。これにより、Śakuntalā と呼ばれる女の子が生まれた。

「こいつを独房に入れて考えさせろ。明日にも家に帰って結婚するか、さらに四年間刑務所で暮らしたいか」

スダルシャンは二十四時間独房に閉じ込められ、次の日また所長の前に引っ張りだされた。

「考えたか？」

所長は真剣な口調で尋ねると、彼は答えた。

「ええ、考えました」

所長は期待を持ち、猫なで声で言った。

「じゃあ、全員の名前を言え」

「書き取って下さい」

話そうとすると、看守は紙とペンを用意したが、ひどく馬鹿にした口調でスダルシャンは言った。

「手紙は全部、スダルシャンが書いた」

看守は青くなり、所長は怒り狂った。

「こいつの記章を外せ。鞭で打て」

身体から模範囚の記章が外され、所長は自分の目の前でスダルシャンを鞭で打たせた。それは、人間どころか銅像でも血を吐くようなものだったが、その日刑務所中で噂になったほど、彼は静かにそれに耐え声さえ出さなかった。

それから彼を独房に入れる時、所長は言った。

「明日も名前を言わなかったら、刑期短縮は全て取り消され、また四年間刑務所で暮らすことになるだろう。よく覚えとけ、スダルシャン。今度は模範囚ではなく普通の囚人と同じように、挽き臼を回さなければならんのだぞ。行って考えろ！」

次の日、スダルシャンはまた引き出されたが、自分の言葉を変えなかった。三年半の刑期短縮は取り消され、粉挽きの労働につかされた。約一ヶ月後、ある日彼が会議派黨員たちの所に来ると、全ての者は彼の悲しみに敬意を表し、その原因は自分たちにあると言った。皆、彼のことをとてもかわいそうだと思ったが、彼は言った。

「あんたたちは、かわいそうだと思っているだろうけど、ちっともそんなことはない。やっとな俺も、マハートマー・ガンディーの兵隊になったと思っているんだ」

「でも、四年は長いよ、スダルシャン」

パルメーシュワリーラール・グプタ氏が同情して言うと、落ち着いた声で答えた。

「俺は、裁判で絞首刑になったら縄をつかむような往生際の悪い男じゃない」

刑務所生活が四年延びたことを、全く悲しんではいなかった。それどころか、誇らしいことであった。その誇りこそがスダルシャンを生まれ変わらせたのだった。

*

一九三〇年、独立運動が吹き荒れる嵐の日々。

シュプレヒコールが大空にこだまし、ピケに舶来衣料の店は悩まされ、道は熱気を帯びたデモ隊でうめつくされ、イギリスの支配機構は怒りで火を吹いていた。

それはデーヘラードゥーンだった。パンディット・マハーヴィール・ティヤーギー⁴⁰は囚われの身で、その妻シャルマダー夫人が戦場にいた。

その日アイスレーホール通りのイギリス人の店に対するピケが始まると、険しい雲行きとなった。一方には速りすぐりの機動隊員が警棒^{ラティ}を構えて戦闘態勢につき、他方には会議派の堅い信念の義勇隊員が死ぬ覚悟を決め、今にも警棒^{ラティ}の雨が降り、頭ががち割られる気配である。

シャルマダー夫人は病気であったが、知らせを聞くと駆けつけた。病気の身でありながら、胸には五ヶ月になる娘ウマーを抱いて、たとえようのない美しさをたたえていた。彼女がアイスレーホールに着くと、もう一方からイギリス人の警視がやって来た。ふたりの間には義勇隊員、群衆、そして警察。

空気が張り詰めていたが、警視はシャルマダー夫人が目止まるといきり立った。

「警棒^{ラティ}行使」

警棒の雨が降り出した。シャルマダー夫人はウマーをひとりの義勇隊員に抱かせると、自らは警棒の雨の中に飛び込んだ。しかし、民衆は皆が皆彼女のように勇気があるというわけではなかった。人々は散り散りに逃げ、警察は怒りに燃えた。義勇隊員は子供を抱いて逃げる時、転倒した。そこへ警察が近づいた。

義勇隊員は我が身を顧みず、その胸に抱くシャルマダー夫人の宝のことだけを考えた。すばやくウマーを草の上に置き、自分はその上に覆いかぶさった。今や彼の腹はウマーを守る鎧となり、天を仰ぐその腰に警棒が続けざまに振り下ろされた。しかし、彼は微動だにしなかった。別の警部がこれを見て、そこまでやって来た。

「ここで死ぬつもりか」

警部は警視の目を盗んで尋ねた。

「ああ、あんたたちがここをのかないなら、ここで死ぬ」

すでにその間、彼は更に二度腰を打たれたが、決して動かなかった。

「おい、お前。地面に捕まったのか？」

「いや、俺はデーヘラードゥーンの宝を預かっているんだ」

警部が肩をつかんで引っ張ると、その下で、つぶらな瞳の赤ん坊がこちらをじっと見詰めていた。警部は義勇隊員の信念の堅さに仰天し、次の日シャルマダー夫人に言った。

「警察はおろか軍隊にも、あのような信念があるものだろうか」

原題 ‘Deś ke Hīre, Motī, Lāl’

⁴⁰ (Mahāvīr Tyāgī, 1889-1980) デーヘラードゥーンの司令官と呼ばれた全インド会議派委員会のメンバー。後に中央政府の閣僚を経験する。

使用テキスト Kanhaiyālāl Miśra: 'Dīp Jale, Śaṅkh Baje', Bhāratīy Jñānpīṭh, New Delhi, 1987

カナイヤーラール・ミシュラ・プラバーカル 1906年5月29日、サハーランプル県デーオバンドに生まれる。15歳で中途退学し独立闘争に参加。1920年、会議派義勇隊員。1924年、社会に奉仕する誓いをたて、パルダー制、不可触制、飲酒、女性虐待等の悪習を廃止するために戦う。1929年、ガンディーに全てを捧げる決意をする。1930、32、42年、投獄。この間、父、妻、息子を失うが、志をまげない。1935年、ガンディーのもとで清貧の誓いをたて、先祖代々の家を二軒寄付する。インド独立の年の1947年8月15日、自らの文学活動が政治という枠にとらわれることを避けるため、会議派を離党。

1929年、ジャーナリズムの世界に入り、81年まで雑誌を編集し、数百にも及ぶ評論を書く。月刊誌は、'Brāhmaṇ', 'Sarvasv', 'Viśvajñān', 'Śānti', 'Jñānoday'。週刊誌は、'Garhdeś', 'Viśvās', 'Vikās'。

1977年から80年まで病に悩まされる。

文学は詩、短編、随筆、ルポルタージュ、児童文学など多岐にわたり、自らの経験に基づいた独特の文章を残している。

主な作品集は、'Nayī Pīrhī Naye Vicār' (1949), 'Jindagī Muskarāī' (1954), 'Moṭī Ho Gayī Sonā' (1957), 'Ākāś Ke Tāre, Dharatī Ke Phūl' (1952), 'Dīp Jale Śaṅkh Baje' (1957), 'Baje Pāyalīyā Ke Ghungharū' (1957), 'Kṣaṇ Bole Kaṇ Muskāye' (1963), 'Mahake Āgan Cahake Dvār' (1962), 'Jiyē To Ēsē Jiyē' (1975) 等。

本篇は、'Dīp Jale Śaṅkh Baje' の25篇の中から序文を含む5篇を選び訳出した。この作品集では、父親をはじめとする身近な人々に題材をとり、その人間性が描かれている。普通の人々を闇夜を照らす^{ともしひ} 燈と日の出前に吹き鳴らされる法螺の音にたとえ、その生き方に読者が人生の規範を見出だすようにという著者の願いがこめられている。

訳・注 長崎広子 (大阪外国語大学大学院)